

# フラ・ベルナルデイーノ・カイーミの「代用エルサレム」

— ヴアラツロのサクロ・モンテの失われた初期の形態について (下)

関根 浩子

〔承前〕※

(案内書の各capitoloの訳文、傍線、「」による註記は稿者による)

①「カルヴァリオとその付近」—(13)へ聖衣を剥がれカルヴァリオへ送られるキリスト、(14)へ磔刑、(15)へ卒倒の聖母、(16)へ聖体塗油石の礼拝堂

このゾーンの四堂のうち、問題なく場所を同定できるのは(14)へ磔刑の礼拝堂のみである。しかし、同堂も、場所以外は一五—四年当時の面影を伝えてはいない。

現在のカルヴァリオ山の総体は、へ十字架に釘で打ち付けられるキリスト(第37堂)とへ磔刑(第38堂)、そしてへ十字架降下(第39堂)の礼拝堂から成っているが、第37

堂と第39堂は十七世紀前半に、また、礼拝堂の前方の開廊とふたつの階段は十九世紀半ばに建設されたものである。さらに、現在の第38堂は、一五二〇年にはまだ建設中であり<sup>(18)</sup>、ガウデンツィオの八十七体のテラコッタ像(一五二〇—二八年頃)と二体の木彫像は堂内には配されていない<sup>(19)</sup>。従って、一五—四年当時の礼拝堂は、現在のそれとはかなり異なるものであったはずである。実際、一五—四年の案内書には、「次いで君は十八段の階段を上って、例のカルヴァリオと呼ばれる山に至り、そこで、十字架にかけられたキリストに涙するであろう。そして、いかなる罪もないキリストの周囲に偽りのユダヤ人、両脇に罪人、また、十字架の下に、苛酷な刑に耐える創造主をみつめるマ

グドラのマリアを目にするであろう」(Capitolo XV) としか記されていない。また、同堂の解説が Capitolo XV のみで終えられていることから、同堂と堂内のミステーロ装飾とが、現在のガウデンツィオによる大きな礼拝堂と大規模な群像表現とは異なっていたことが推察される。カルヴァリオの礼拝堂は、事実、元来は岩の上に孤立して建っており、岩を穿って造った階段が両脇につけられていた。また、正面に入口はなく(代わりに窓がふたつあった)、側壁にあつたふたつの小扉から出入りが行われていた。さらに、巡礼者と群像とを隔てる壁や鉄柵もなかった<sup>(20)</sup>。従って、当初の(14)〈磔刑〉の礼拝堂は、位置的には現在の第38堂と同じ場所にあつたとしても、後者よりはるかに小規模で簡素であつたことは疑いない。ガッローニがその平面図すら示していないのも(図19)、また、デビアツジがそれを凹型の小礼拝堂(sacello)として図示<sup>(21)</sup>しているのも同じような見解によるものであろう。ちなみに、アレッシシの全景図(前号図17 a、b)でHHの付いた方形の平面図に「Quadrata alla croce N. S. (つまり主は十字架に向かう)」と註記を添えて示されている〈磔刑〉の礼拝堂は、ガウデンツィオが設計したものであり、最初の礼拝堂を示すものではない。

このカルヴァリオ付近には、その他、〈磔刑〉の御堂のそれぞれ北と南についた階段の下に、IIとGのアルファベットで示された矩形の建物と方形の小さな平面図がみられる。これらのうち、Gの平面図には書き込みがあり、「Q. III. la M<sup>ra</sup> Tramorita [つまり聖母が卒倒]」と判読されることから、そこに(15)〈卒倒の聖母〉の礼拝堂が置かれていたことは間違いない。問題は、堂内に仕切りがあつて大、小の部屋に二分されているように見える、IIで示された矩形の平面図である。ガッローニはこれを〈聖衣を剥がれカルヴァリオに送られるキリスト〉の御堂とみなし(図19)、ペッローネは〈聖衣を剥がれカルヴァリオに送られるキリスト〉と〈白布に包まれるキリスト(九二年には〈聖体塗油石〉と改めた)〉と考え(図20)、前者を〈磔刑〉の場所に近い方に、そして、後者を〈キリストの墓〉に近い方の部屋に同定した。さらに、ペッローネは、これらの部屋が、それぞれ現在の〈ヘビエタ〉(第40堂)と〈埋葬〉(第41堂)の礼拝堂に一致し、しかも、元来は矩形のひとつの部屋で、〈聖体塗油石〉を表現する木彫の群像(ヴァラツロ、絵画館蔵)を擁していたとした<sup>(22)</sup>。この最後の問題は別にして、当面の問題である残りの(13)、(16)の礼拝堂の場所の同定について

は、現在の第40堂（ピエタ）の背景に描かれている壁画が、確かに、(13)へ聖衣を剥がれカルヴァリオに送られるキリストへのミステーロに合致していることから、稿者も、(13)の御堂を現在の第40堂の位置に同定したい。また、(16)へ聖体塗油石への御堂についても、Capitolo XVIIに、「次いで君はそこ「カルヴァリオ」から下りて聖体塗油の石へ向かう…」と記されていることから、カルヴァリオの下にあった礼拝堂を探せば、現在の第40堂がそれであれば、第41堂以外に(16)の御堂の場所はありませんと考える。

⑧「キリストの墓」―(17)「キリストの墓」

この礼拝堂は現存しており、場所の同定については問題はない。同堂はこの山の宗教的変遷の核であり、初期の礼拝堂のひとつ、もしくは最初の礼拝堂であった。同堂の入口の上に掲げられている碑板には一四九一年という年代が記されているし、一四九三年四月十四日付けのフランシスコ会士への山上の施設の委託文書でも、同堂は、隣接する最初の隠修所とともに、すでに建設されたものとして挙げられている<sup>(23)</sup>。この礼拝堂は、聖地のキリストの墓の小礼拝堂の室内空間を模倣した、ふたつの小室から成っている<sup>(24)</sup>。前室には、入って左側の龕のなかにマグダラのマリア

の木彫像が配され、小さな出入口の上には、「Simile e il Santo Sepulcro de Yesu Kristo [イエス・キリストの聖墓に類似]」と書かれた銘板があった。また、そこにはかつてひとつの石があり、「裸にされた者はここにはいない」と告げる一体の木彫の天使像がその上に置かれていた。しかし、現在は、マグダラのマリア像しか見られない。奥の墓室には、ガウデンツィオの《横臥のキリスト》の木彫像(図22)が石棺上に横たえられている。この石棺は、元来はすべて石製で、床にじかに置かれていた。そして、両側面には、受難のシンボルを手にした二体の木彫の天使像が配され、上方にはガウデンツィオに帰される《復活のキリスト》の油彩画があったが、これらは現存していない。

⑨「キリストの墓付近」―(18)へ聖母に出現するキリストへ、(19)へマグダラのマリアに出現するキリストへの礼拝堂

⑩「キリストの墓」に続く(18)へ聖母に出現するキリストへと(19)へマグダラのマリアに出現するキリストへの礼拝堂については、一五一四年の案内書の記述からは、両堂が「キリストの墓」を出て進んだ所であったこと、そして互いに近くにあったことしか読み取れない。しかし、アレッシの全景図(前号図17a)には、L1で示された「キリスト

の墓への御堂の前の拱廊を少し南に下った所の西側（拱廊の裏）に、MMと付された八角形の平面図が見られ、そこには「*appare a madalena*」マグダラのマリアに出現する」と註記されている。同じアレッシの手稿本の序文（*car. 7*）では、同堂は、堂内は八角形でも外観は円堂とされているが、(19)の御堂がこの八角形の平面図の位置に建っていたことは間違いない。そして、堂内には、セサッリの一五六六年の案内書によれば、ガウデンツィオの木彫像が配されていた。一方、近くにあるはずの(18)の御堂は、アレッシの全景図にも、ガッローニやペッローネの復元図（図19、20）中にも見出されない。しかし、(19)の礼拝堂の近くにある凹型の平面図に注目すると、「*Qui si fara N. S. apparire alli due discepoli in EMAYS*」<sup>(17)</sup>には、「エマオでのふたりの弟子への主の出現が<sup>(18)</sup>つくられるであろう」とあり、現在は「エマオでのふたりの弟子への出現」ではないことが示唆されている。さらに、アレッシは、「エマオでのふたりの弟子への出現」用の設計図（*car. 278*）の解説中で、「ここに掲げている平面図は、エマオに向かっていたふたりの弟子にキリストが出現するミステーロを含むものであり、私は、それが、マグダラのマリアの神殿の前をはしる拱廊の端に

当たる、十字架の礼拝堂と呼ばれる、すでに仕上がっている御堂のなかに設置されればと思う……」と述べており、凹型の御堂が「十字架の礼拝堂」と呼ばれていたことを示唆している。ガッローニとペッローネの復元図において、凹型の御堂が「十字架」の礼拝堂（*Cappella della croce*）とされているのは、このアレッシの記述に拠っている。しかし、一五一四年の案内書には同名の礼拝堂は存在していない。そして、後に、デビアツジが(18)の御堂と同定し<sup>(23)</sup>、また、ペッローネも(18)の御堂と同定し直しているように<sup>(25)</sup>、凹型の平面図は、ふたつの外窓にそれぞれ聖なる円柱と十字架が付いた(18)へ聖母に出現するキリストへの礼拝堂であったと考えられる。

①「ガリラヤ」——(20)へガリラヤで弟子たちに出現するキリストへの円形礼拝堂

①「オリーブ山」——(21)へキリストの昇天へ、(22)へ主祷文を教えるキリストへ、(23)へクレド（使徒信条）起草への礼拝堂

(20)へガリラヤで弟子たちに出現するキリストへの礼拝堂の場所は、(21)へキリストの昇天への礼拝堂やその他のオリーブ山上の礼拝堂の同定とも関係してくるので、ここではそれらを一緒に考察する必要がある。ここで言う「ガリラヤ」

は、オリヴ山の北山腹に建っているガリラヤの人々 (Viri Galilei) と呼ばれるギリシア正教会の場所を指している。アレッシの全景図 (前号図 17 a) には、西側の崖際の中央よりやや上方に、「昇天」を意味していると思われる「LASESIO」と書き込まれたラフな二重円はみられるが、ヘガリラヤで弟子たちに出現するキリストと推測される註記はどこにも見出されない。また、彼の手稿本の序文や各平面図の解説中にも、ふたつの異なる小丘、並びにそれらの上に建てられていた礼拝堂を同定させる手懸りはない。一五二四年の案内書には、(19)ヘマグダラのマリアに出現するキリストの御堂 (Capitulum XXV) の後に、「次いで、そこから上ってガリラヤに向かう」(Capitulum XXVI)とあり、続いて、「この礼拝堂は円堂」で、「神々しいキリストが、満足げに両腕を広げ、弟子の間に出現している様子が描かれている」とある。さらに、「その出入口には、「堂内側に」自分の過ちに涙し、恥ずかしさのために主から身を隠しているペテロが描かれている」(以上 Capitulum XXVII) とある。そして、次の Capitulum XXVIII の冒頭の、「この「ガリラヤ」を下りて戻り、再びあの祝福されたオリヴ山に登り、山上で……絵が描かれた円堂に驚嘆する」へと続

いている。その後の(22)へ主祷文を教えるキリストの御堂については、「この「オリヴ山の礼拝堂」から再び外に出た後、そこを少し下ると、またもそこには完成した場所が見出される……」(Capitulum XXX)とある。次いで、Capitulum XXXII において、「進んでいくと、聖なる使徒信条が起草された別の未完成の場所がある……」として(23)ヘクレド起草の礼拝堂へ移っている。従って、以上のカピートゥリからは、当時は、(19)ヘマグダラのマリアに出現するキリストの礼拝堂の近くに「ガリラヤ」山に見立てられた小丘があり、(19)の御堂から見るとは別の方角に、「オリヴ山」に見立てられた小丘があったことが推測される。しかし、ガッローニは、その一五二四年の案内書の存在を知らずに、主にセザッリの案内書に拠って、まず、ヘキリストの昇天の場所の同定を試みた。セザッリの案内書は、ヘキリストの昇天(一五六六年版は car. 12 recto、一五七〇年版は car. 12 verso)を、「皆がオリヴ山と呼ぶ別の丘の上にあるもうひとつの教会堂では、イエスが天の父のもとへ真っ直ぐに昇天している。キリストが聖なる御足によって我々に残そうとした聖跡はそこに彫り込まれている。小教会堂に表現されているこの現象は、着工された美しい

神殿のなかに刻まれるであろう」とだけ記しており、この記述からだけでは、ヘキリストの昇天の小教会堂は、「オリヴ山」上にあつたが、新しい昇天用の建物は何処に建設されていたかわからない。しかし、彼は、アレッシの全景図（前号図17 a）の〇〇で示された<sup>(18)</sup>へ聖母に出現するキリストの御堂の北西のゾーンをオリヴ山とみなし、両堂ともその上にあり、「LO SPIRITV SANTO」の註記を添えて〇〇で示された円堂が最初の小教会堂、そして、その北側の「LASESTIO」と書き込まれた所が建設中の神殿の場所だと考えた<sup>(26)</sup>。また、彼は、ヘガリラヤで弟子たち<sup>(26)</sup>に出現するキリストの場所についても、昇天の礼拝堂があつたとした丘と同じ丘の上にあつたと考えた。そして、それは小礼拝堂で、新しい昇天の礼拝堂用の空間を拡大するために取り壊されたか、一五九三年のバスカペの司教訪問記録に挙げられている「泣くペテロ」の礼拝堂の壁に描かれた単なる壁画にすぎなかつたと推測した。つまり、彼は、同じ小丘の上に、最初のヘキリストの昇天の小教会堂と「泣くペテロ」の礼拝堂が建っており、ヘガリラヤで弟子たち<sup>(26)</sup>に出現するキリストは後者の堂内に描かれていたか、小礼拝堂として建っていたが取り壊されたと考えたのである。

しかし、「泣くペテロ」の礼拝堂は存在したことはないし、「泣くペテロ」は、逆に、ヘガリラヤで弟子たち<sup>(26)</sup>に出現するキリストの御堂内の出口付近に描かれた壁画にすぎなかつた（二節参照）。また、かりにガッローニ説を採用するとして、それらを一五一四年の案内書の記述に当てはめると、<sup>(22)</sup>へ主祷文を教えるキリストと<sup>(23)</sup>へクレド起草の御堂も、ヘキリストの昇天の御堂があつた丘の斜面に設置されていたと考えられるので、ひとつの丘の上に二堂、そして、同じ丘の斜面上に二堂と、合計四堂がごく近くにあつたことになる。しかし、山上の最古の景観図群（図24、25）の右端の小丘上には、ひとつの円堂しか確認されない。さらに、ガッローニは、一九一四年の主著において、アレッシのプロジェクトを実現するための一五七二年の合意文書（memoriate、十一月二日）を自ら紹介しながら、そこに言及されている「…現在「ガリラヤで」と言われている例の礼拝堂がある場所には、主の昇天のミステーロがつくれるべきである」<sup>(27)</sup>という「ガリラヤ」の礼拝堂に関する記述を考慮に入れていない。

多年にわたって受け入れられてきたガッローニ説の以上のような矛盾に気付いたデビアツジは、<sup>(20)</sup>と<sup>(21)</sup>の礼拝堂の

位置の再同定を試みた。彼が参照した史料は、一五一四年の案内書以外は、ガッローニが参照したものと異ならないが、聖地のキリストゆかりの場所と、ヴァラッロのそれぞれ対応する場所との対応関係から両堂の場所の同定を試みた点は、ガッローニとは根本的に異なっていた(図26、27参照)。彼は、まず、一五一四年の案内書の *Capitulum XXXVI* (ヘガリラヤで弟子に出現するキリスト) から *Capitulum XXXIII* (クレドの起草) までの記述を再検証し、ただひとつの丘だけを想定したガッローニに対し、ふたつの丘があったはずだと考えた。そして、ひとつをガッローニが想定したのと同じ場所に、そしてもうひとつを現在タボール山に見立てられて第17堂(ヘキリストの変容)(図28)が置かれていた場所に同定した。後者は、中央ゾーンのなかでも最も高い場所であり、当時すでに山上で利用されていた丘(カルヴァリオ山、シオン山)以外で高い所と言えば、これら二ヶ所以外にはなかった<sup>25)</sup>。そして、ガッローニがオリーヴ山とした西の崖側の丘を、聖地の同名の場所との関係からガリラヤ山と同定し直し、他方をオリーヴ山として、そこに最初の昇天の御堂(図27)があったとした。さらに、一五一四年の案内書の記述と、エルサレムの対応す

る場所とに従って、(22)と(23)の礼拝堂を後者の丘の斜面上に同定した。つまり、アレッシの全景図(前号図17 a、b)で言えば、中央にQで示された円形の平面図がある所がオリーヴ山で、その南側の斜面に幅広の消えかかった凹型で示されているのが(22)の御堂、さらに、その南側のヘルサレム入城の礼拝堂に予定されている辺りが(23)の御堂の場所であったとした。また、「ガリラヤ山」上にあった(20)ヘガリラヤで弟子たち<sup>26)</sup>に出現するキリストの御堂については、前述の一五七二年の合意文書の記述に基づいて、「LASESIO」と書き込まれた二重円の場所にあったとした。デビアッジの説は、「ガリラヤ山」上の礼拝堂の同定については、一五七二年の文書の記述から判断してほぼ間違いない。これに対し、「オリーヴ山」の方には、聖地における同名の場所との一致以外に根拠はない。しかし、一五七二年の文書では、「タボール山」は、「□□□□」の礼拝堂とタボール山の礼拝堂を仕上げるよう努めること。タボール山の礼拝堂では、堂内の突出した付け柱を取り去り、既述の礼拝堂を拡大して、タボール山をもっとゆったりさせるべきである。それは、必要となる多大な出費を避けるためでもある<sup>27)</sup>と記されている。稿者の解釈に誤りがなければ

ば、この記述は、ガッローニが判読できなかった既存の□□の礼拝堂を、経費節減のためもあって拡大して再利用し、ゆったりとしたタボール山の礼拝堂にすることに合意したものであり、タボール山には、何かはわからないものの、先行の礼拝堂があったことを教えてくれる。そして、拡大する必要があったということからは、それがやや狭小な礼拝堂であったことが推測される。この場所が、その他で言及されているシオン山でも、カルヴァリオ山、ガリラヤ山でもないとなると、残りはオリヴ山以外にはなく、その不詳の礼拝堂も、セサッリが「小礼拝堂(*piccola chiesa*)」と記したへキリストの昇天の最初の御堂以外には考えられない。それは、最古の景観図群(図24、25)では、現在のタボール山付近に見られる円堂に該当しよう。そして、堂内には、一五一四年の案内書の記述通り、昇天するキリストとそれを見上げる使徒や聖母が表現されていたはずである。

デビアッジ説の妥当性は、彼の同定に従って一五一四年の案内書の(20)堂から(23)堂までの記述を順に辿り直すと、矛盾なしに辿れることから首肯される。しかし、セサッリの案内書の記述とは、(22)と(23)の御堂が合致しない。それは、

セサッリの記述では、後二堂がすでにオリヴ山の斜面上にはなく、ふたつの別の丘、しかも(23)の御堂の方が(22)のそれよりも高い所に移されているためである。(22)、(23)の御堂は、おそらく、一五一四年から一五六六年までの間のいずれかの時期に場所を変えられたのに違いない。十七世紀初め頃の作品とされるエンリコ・ファン・スコレルのエツチング(ミラノ、ベルタレッリ・コレクション)による全景図には、現在のタボール山(かつてのオリヴ山)の南側斜面から神殿の広場の一部にかけて、まだ整備されていない起伏に富んだゾーンがあるので、そのどこかに配されていたのではないだろうか。以上のようなデビアッジの同定は、必ずしもすべての研究者によって受け入れられてはいないが<sup>(3)</sup>、稿者は、(20)から(23)までの礼拝堂を、その妥当性ゆえに彼の説の通りに同定したい。

Ⓚ 「ガリラヤ山とオリヴ山の間の谷」―(25)へ天使による聖母への死のお告げの礼拝堂

一五一四年の案内書の *Capitolo XXXV* で、「ガリラヤ山とオリヴ山との間の谷」にあるとされている場所はどこに置かれていたのであるうか。アレッシの全景図(前号図17 a)にはそれと同定できる礼拝堂は見出されない。しか

し、彼の同じ手稿本の序文 (car. 6v) には、「……」[「エマオでの弟子への出現」から少し離れた所に方形の礼拝堂があり、そのなかには、現在、聖母に死のお告げをしている天使が見られる。この礼拝堂を修復し、ここには不適切なそのミステーロを取り去って、できればそこに主イエス・キリストが弟子たちに出現するミステーロを再設置したい:] という記述が見られる。また、ヘマオで弟子に出現するキリストへの礼拝堂の設計図の説明 (car. 28b) にも、「……」に掲げる平面図は、イエス・キリストが弟子たちに出現した神殿用であり、できればそれを、現在は天使による聖母マリアへの死のお告げが描かれている礼拝堂に建てたい:] とあることから、(25) の礼拝堂は、彼の全景図では PP で示され、「Quivi appare N.S. alli Apostoli」[「」] で主が弟子に出現」と書き込まれた、方形に小さなアプシスがついた平面図で示された所に置かれていたことがわかる。この位置は、現在の「ピラトの館」の第27堂辺りに同定される。ちなみに、ガッローニは、図19のように、同礼拝堂をエルサレムで慟哭の聖母の礼拝堂と呼ばれているへ聖母へのキリスト捕縛のお告げへの礼拝堂 (図では C. D. SPASIMO) と同定し、セザッリが一五六六年の案内書中 (car. 13 recto)

でそれをへ天使による聖母への死のお告げへの御堂として  
いるのは彼の誤解だとしたが<sup>(21)</sup>、それは、ヴァラッロに苦  
しみの道があったとして、当該の礼拝堂をその道の一構成  
要素と考えたガッローニの誤解であった。また、ガッロー  
ニ説を踏襲したと思われるペッローネの復元図 (図20) も、  
この平面図をへ慟哭の聖母 (Lo Spasimo di Maria) への御  
堂のものとしている (九二年には、彼女は見解を変え、ア  
レッシの記述を考慮して確定を保留)<sup>(22)</sup>。しかし、エルサ  
レムの同名の場所から判断して、PP の場所は、アレッシが  
記した通り、へ天使による聖母への死のお告げへのそれであ  
ったはずである。

①「ヨシヤファトの谷(=キドロンの谷)」——(27)へ聖母の墓へ  
(28)へヨアキムの墓へ、(29)へアンナの墓への礼拝堂

(27)へ聖母の墓への御堂は、既述のように現存している  
(剥された壁画はヴァラッロの絵画館が収蔵)。現在の第46  
堂 (図29) がそれであり、アレッシの全景図 (前号図17 a)  
では、右先端 (南西の角) に SS で示されている。これに対  
し、一五一四年の案内書でへ聖母の墓へに後続している(28)、  
(29)の御堂はそこには見出されない。しかし、彼の手稿本の  
car. 310 の平面図の解説には、「掲げているこの方形の平面

図は、「最後の」審判の神殿に用いられる予定であり、この神殿は、現在は聖アンナの墓が見られる所に建てられねばならない」とあり、彼の時代には「アンナの墓」の御堂が存在していて、しかも、「最後の審判」のミステーロへの変更を予定されていたことがわかる。こうして改めて全景図を見直すと、SSの「聖母の墓」の場所の北東に、RRで示されたふたつの横長の「凹型」と、「Qui si fara il Giudizio」ここに最後の審判はつくられるであろう」の註記が見出されるので、ここが(29)の御堂の設置場所であったと特定される。しかし、アレッシにも、セサツリの一五六六年の案内書のCar.13 rectoにも、(28)「ヨアキムの墓」の御堂についての記述はない。従って、十六世紀の六〇年代には、(28)の御堂はすでにそれを特定させる装飾や建物を失っていたに違いない。しかし、一五一四年の案内書のCapitolo XLIIIで、「…[君は]互いに向き合ったヨアキムとアンナのふたつの墓を目にするであろう…」と記されている以上、「凹型」の一方が「ヨアキムの墓」の御堂であることは疑いない。なお、それらは、現在のロープウェー乗場前の小広場辺りにあつたはずである。

#### ㊦「救済の泉（＝復活のキリストの泉）」

この泉は、神殿の広場の当時と同じ場所に現存しているが、水盤上の復活のキリスト像はコピーである（オリジナルはサクロ・モンテの博物館が収蔵）。

#### 四 一五一四年の案内書の礼拝堂群とエルサレムの「キリストゆかりの場所」

三節の同定作業によって、一部を除いて場所を確定できた礼拝堂と堂内のミステーリ装飾は、二節でキリストゆかりの町や場所ごとにそれらを整理し直してから考察したことが有効であったことからわかるように、町や場所ごとにまとまって配されていた。つまり、礼拝堂は、聖地のキリストゆかりの町や場所の位置関係や、それらの主要な特徴を彷彿とさせるように配されたり、建設されたりしていたと言える。

それでは、ヴァラツロの初期の施設の聖地模倣とはどのような、ないしはどの程度のものであつたのだろうか。以下で、ヴァラツロの礼拝堂群の配列や建築的特徴と、聖地の対応する町や場所の位置や特徴との関係を見体的に見て

みよう(考察順序は三節に準じる)。

①「ナザレ」―聖地では、ナザレはエルサレムの北に位置し、そこでは、ラテン告知教会堂の「受胎告知のグロッタ(聖洞穴)」が巡礼者の主要な崇敬対象であった。そして、このグロッタは、一二六〇年に同教会が回教徒によって完全に破壊された後も、キリスト教徒の巡礼対象であり続けた。ヴァラツロでも、「ナザレ」は「エルサレム」の北に位置している。また、三節で同定した、斜面を穿って造ったような、暗くて狭い最初の「受胎告知」の礼拝堂(前号図5)は、この聖洞穴の特徴を模造しようとしたものであったに違いない。

②「ベツレヘム」―ベツレヘムは、パレスティナではエルサレムの南に位置しているが、ヴァラツロではエルサレムの東にあるので、方角的には一致していない。しかし、一五一四年以降修正が加えられたとはいえ、現存しているかつての(3)ヘキリストの降誕(前号図8)と(4)ヘキリストの神殿奉献(Ⅱ割礼)(前号図10)の礼拝堂が、ベツレヘムの降誕教会のグロッタ(前号図9、12)と、グロッタの右側の階段をのぼった所にある出口の左手の、割礼を記念した場所の建築的構造(前号図11)を模造していることは明らかである<sup>2)</sup>。ベツレヘムでは、降誕のグロッタの中央に祭壇があり(前号図12、A)、祭壇下の大理石にキリストの降誕の場所が星型で示されている。ヴァラツロでも、当初は、現在の第6堂には祭壇だけが置かれていた。そして、祭壇下の大理石には今も星型で示された降誕の場所を確認できる。また、ベツレヘムでは、聖洞穴の両側に一階に上がる階段があり、その右(南)側の階段の西にある空間に、プレピオ(B)やマギの祭壇(C)、円柱や螺旋柱(前号図9、12)があるが、ヴァラツロでもそうした建築構造と建築意匠(前号図6)はそっくり模造され、祭壇の両側に階段がつき、右(南)側の階段の西にある空間に、一五一四年当時は、「降誕」と部屋に入ってこようとす「マギの礼拝」を結合した場面が表現されていた。さらに、ベツレヘムでは、右(南)側の階段を上った上堂への出口に半円形の階段が造られ、その左手側にキリストの割礼の祭壇が置かれているが(前号図11)、ヴァラツロでもそうした構造は模造されており、グロッタの右(南)側の階段をのぼった上階への出口に半円階段(前号図10)が造られ、その左手側に(4)ヘキリストの神殿奉献(Ⅱ割礼)(現在の第8堂)の礼拝堂が置かれている。

◎「シオン山」—シオン山は、聖地では、エルサレムのシオン門の南に位置している。そして、前号の図16に見られるように、カイアフアの館の南西に、永眠のマリア像を地下聖堂に配したドルミシオンと呼ばれるマリア永眠教会堂があり、その南側のフランシスコ会旧修道院に隣接した建物の上階にコエナクルム（最後の晩餐の部屋）、そしてその東隣に聖霊降臨の部屋があった。さらに、コエナクルムの下階は、キリストが弟子の足を洗った所と伝えられている（前号図15）。ヴァラツロでは、「シオン山」の総体は、エルサレム（カルヴァリオ）の東に設置されていた（前号図17b）。そして、ドルミシオンに相当する堂内が円形の②6へ聖母が晩年を過ごし死を迎えた礼拝堂（＝旧教会堂の最初の核）が置かれ、堂内には、ガウデンツィオに帰されるマリア永眠像（図18）（現在は新教会堂のスクロークと呼ばれるクリプタにある）とそれを取り囲む弟子たちの木彫像が配されていた。また、②6の礼拝堂の東には、(5)（最後の晩餐）の礼拝堂を配し、同じ堂内の祭壇にへキリストによる弟子の洗足）のミステークを表現していた。さらに、その東隣には、②4△（聖霊降臨）の礼拝堂も建設される予定であった。従って、「シオン山」においても、方角は別にして、礼

拝堂の配列は、聖地におけるシオン山の主要な聖所やモニユメント群の位置関係、並びに建築的特徴を再現するように工夫されていたと言える。

①②③④⑤「ゲッセマニ」、「ガリラヤ」、「オリヴ山」、「ガリラヤとオリヴ山の間谷」、「ヨシヤファトの谷」—聖地のゲッセマニやガリラヤ山、オリヴ山、ヨシヤファトの谷と、それらに対応するヴァラツロの礼拝堂群との関係については、三節においてすでに確認したので、ここでは、そうしたキリストゆかりの土地どうしの位置関係についてのみ言及しておこう。それらの場所は、聖地では、エルサレムの東側の城壁外に展開しているが、ヴァラツロでは「エルサレム」の西側と北側を囲むように配されていた。しかし、ヴァラツロの北西の方角を、エルサレムの東の方角と仮定すれば、キリストや聖母マリアにゆかりがある場所どうしの位置関係は、聖地のそれを反映させていたと言える。さらに、ヴァラツロのかつての「ヨシヤファトの谷」に孤立して現存している②7（聖母の墓）の礼拝堂（図29）も、聖地の対応する墓と酷似している。聖地の聖母の墓は、十四世紀後半以降フランシスコ会が所有していたが、十七世紀に彼らから奪取されて以来今日に至るまで、カトリック

教徒には接近を許されていない聖所である<sup>(2)</sup>。この墓はユダヤ式に倣って狭く、正面右側に小さな入口があり、堂内には亡骸を横たえる石の台が置かれているが、ヴァラッコのそれも、手本と同様に非常に小さく、正面右側に小さな入口が開けられ、堂内には亡骸を横たえる石製の台が置かれている。

⑨「エルサレム(苦しみの道?)」——ミステリーの内容上、当然エルサレム旧市街か、旧市街の苦しみの道上で生じた事件と考えて「エルサレム」内にまとめた、△(10)へアンナスの法廷でのキリストへ△(11)へピラトの法廷でのキリストへ、(12)へ十字架の下に倒れるキリストへ、(1)へ聖母の休息への礼拝堂は、聖地ではどこに位置付けられているのであるうか。アンナスの館は、エルサレムでは都の南西(アルメニア人地区)の、シオン門のすぐ近くに見出される。しかし、ヴァラッコでは、これに対応する礼拝堂は、先述のように具現されることはなかった。また、ピラトの館は、カイミーの時代には、すでにそれをエルサレム市街の北東の地区にあつたアントニア要塞跡に同定することが定着していた。そして、それは、現在の苦しみの道の第一留あたり<sup>(3)</sup>に確定される。従つて、カイミーがもしこの館を当初から

ヴァラッコに設置しようとしたのであれば、中央ゾーンの西側の「エルサレム」と、「ゲッセマニ」や「ヨシャファットの谷」との間のどこかに見出されるはずである。しかし、実際には、三節で見たように、(11)の礼拝堂は、「エルサレム」のゾーンからかなり離れた北側の当時の門(現在の補助門)の近くに建設されていた。次いで、十字架の下に倒れた場所は、当然苦しみの道上のどこかに同定されなければならぬが、十五、十六世紀には、エルサレムでは、現在の苦しみの道の十四の留<sup>(4)</sup>(これらのうち三留が転倒に充てられている)はまだ確定されてはいなかった。しかし、十五世紀にエルサレムに巡礼したマリアーノ・ダ・シエナ(一四三二年に巡礼)やギョーム・ウエイ(一四五八、一四六二年に巡礼)らの巡礼記には、キレネのシモンが十字架を負うよう命じられる前に、イエスが十字架の下に倒れた所が挙げられているので<sup>(5)</sup>、そこがヴァラッコの(12)の礼拝堂と対応していると言えるかもしれない。そして、その場所<sup>(6)</sup>は、シモンが十字架を負う所(現在の第五留)より前と<sup>(7)</sup>言うことであれば、現在の慟哭の聖母マリア教会(イエスと聖母マリアが出会った地点、現在の第四留)の近くにある、キリストが最初に転倒した所と想定されている第三留

迎りに同定できるかもしれない。しかし、ヴァラッコの(12)の礼拝堂は、エルサレムの現在の苦しみの道の第三留付近の場所を想定して建設されたものであったとしても、(17)へキリストの墓の西側に置かれるべきところが、(17)の御堂の北に当たるかなり離れた所に置かれている。従って、(11)の礼拝堂と同様に、聖地のキリストゆかりの場所と密接な関係にあるその他の礼拝堂群と同じ構想の下で配されたものとは考えられない。さらに、十字架を負ったキリストと出会った後に、カルヴァリオへ向かう途上で休息した聖母を表現している(1)へ聖母の休息の礼拝堂に対応する場所は、エルサレムには見出されない。そして、ヴァラッコにおいても、(1)の御堂は、「エルサレム」のゾーンにはなく、登山路上に配されている。従って、これらの「エルサレム内」の礼拝堂群は、稿者によれば、その他の礼拝堂群とは別のコンセプトのもとに挿入されたものに違いない。

とところで、ヴァラッコには、そもそも「苦しみの道」、ないしは「十字架の道」は設定されていたのであろうか。ガッローニは、ヴァラッコの「代用エルサレム」上に苦しみの道があったと考えた(図19)。そして、それを、現在の補助門の脇にあったピラトの館から、黒い教会の(12)へ十字

架の下に倒れるキリストの御堂、次いで(25)へ天使による聖母への死のお告げの御堂(ガッローニはこれをへ慟哭の聖母の御堂と誤解)、さらに(13)へ聖衣を剥がれカルヴァリオへ送られるキリストの御堂を経て(カルヴァリオ(山)へ至るものであったとした<sup>1)</sup>)。このガッローニの説は、次いで、ペッローネに受け入れられたが(図20)、デビアッジは、さまざまな根拠から、ヴァラッコでは、苦しみの道は、カイーミによっても後任者によっても決して着手されなかつたばかりか構想すらなされなかつたと論駁した<sup>5)</sup>。確かに、デビアッジが言うように、ピラトの館は一五二四年には存在しておらず(建設予定)、一五四三―五〇年頃と推測されている最古の景観図(図24)にも確認されない。そして、セサッリの一五六六年の案内書で初めて未完として語られる。従って、その着工は、一五四三―五〇年よりも後であるだけでなく、一五六六年に近い時期、すなわち、カイーミが没してから半世紀以上も後になってなされたものであった。また、(13)へ聖衣を剥がれカルヴァリオに送られるキリストのミステーロは、カイーミの死後に、ガウデントイオが部屋を二分して設置したものであったので、(カルヴァリオ(山)の下の礼拝堂には、当初はへ聖体塗油

石のミステーロしか配されていなかった。さらに、ガッローニが（慟哭の聖母）の御堂とみなした礼拝堂は、一度としてそのようなミステーロを受け入れたことはなく、最初から（天使による聖母への死のお告げ）のミステーロを表現していた。従って、稿者も、カイーミの構想には苦しみ<sup>①</sup>の道は含まれていなかったと考える。しかし、黒い教会はすでに一五〇一年には建設されて、堂内には（十字架の下に倒れるキリスト）のミステーロが表現されていたことや、カイーミの没後にガウデンツィオが<sup>②</sup>の御堂を建設したこと、さらに、時代は下るとはいえ、ピラトの館が現在の補助門の近くに建設された以上、カイーミの後任の誰かが、かなり早い時期に、地形模倣というコンセプトには基づかない「苦しみ<sup>③</sup>の道」、ないしは「十字架の道」の挿入を試みようとしていたように思われる。そして、それは、エルサレムにおいてではなく、西欧のアルプス以北で十五世紀後半頃から流布し始めていたキリストの受難に対する特殊な諸信仰の実践形態の影響下で行われたことであつたと考えられる。しかし、地形模倣とは無関係に挿入されてきたこの一種の十字架の道は、アレッシによる再整備計画（一五六五―一六九九年）によって中断され、その後も再

開されることはなかった。そして、同道を構成していた礼拝堂は、献堂名を変えられるか取壊されてしまったと考えられる。

①②③④「カルヴァリオ」、「カルヴァリオ付近」、「キリストの墓」、「キリストの墓付近」―イエスの時代、彼が磔刑に処せられたカルヴァリオ（ゴルゴタ）は城壁の外にあつたが、ローマ時代に城壁の位置が変わつたことで、必然的に城壁内に取り込まれるに至つた。そこは、現在、聖墳墓記念聖堂内（図30）の入口のすぐ右（北西）側辺りに同定される。ここにはカルヴァリオと呼ばれる二階構造の建物（矩形プラン）が建つており、上階にはキリストの磔刑の礼拝堂、また、一階にはアダムの亡骸が置かれた礼拝堂が設置されている（図21）。そして、かつての第二の入口（二戸外からカルヴァリオへ至るための貴人用の入口）のアトリウムであり、十四世紀以降フランシスコ会士と関係があつた所には、フランク人礼拝堂（聖ヨハネと敬虔な婦人たち、あるいは慟哭の聖母の礼拝堂とも呼ばれる）が設置されている<sup>⑤</sup>。また、同聖堂の入口から堂内に入り、わずかに直進した所（カルヴァリオのすぐ西隣）には聖体塗油石が置かれ、信者らの崇敬を集めている。次いで、カルヴァリオ

から十五メートルほど離れた同じく西側に、聖墳墓の小礼拝堂が建っている。この小堂は、破壊と再建が繰り返されたことで何度か形を変えたが、一〇〇九年の再建後は馬蹄形プランになっていた（十六世紀後半には外観は再び変えられる）。そして、堂内は、天使の間と呼ばれる前室と、低くて狭い入口をくぐった先にある墓室（図23）とに分けられていた（その構造は現在も変わっていない）。さらに、この聖墳墓の北側にマグダラのマリアの祭壇とマグダラのマリアの礼拝堂、そして、後者の北西に隣接して聖母に出現するキリストの礼拝堂（現在のフランシスコ会士の祈祷席）があった。ちなみに、聖母へのキリストの出現のエピソードは福音書には語られていないが、古くから伝統的にこの礼拝堂で記念されていた<sup>7)</sup>。

ヴァラツロでは、「カルヴァリオ」とその付近、並びに「キリストの墓」とその付近は、一五二四年当時も現在も、「エルサレム」にあたる整備された高い中央ゾーンに配されている（前号図1、17 a、b）。まず、(4)〈磔刑〉の礼拝堂は、「シオン山」の総体のほぼ北西の位置に、既述のように、岩を土台として高く建設されていた。そして、その南側の階段の下に、エルサレムのフランク人礼拝堂に相当す

(15)〈卒倒の聖母〉の小礼拝堂があり、反対の北側の階段下に(13)〈聖衣を剥がれカルヴァリオへ送られるキリスト〉と(16)〈聖体塗油石〉の礼拝堂があった。次いで、カルヴァリオから、エルサレムにおけるのと同じ距離（十五メートル）だけ西に離れたところに、(17)〈キリストの墓〉の御堂が設置されている。そして、ヴァラツロにおいても、同堂は前室と墓室のふたつの部屋から成っている（図22）。さらに、キリストの墓の御堂の北側には、同様に、(19)〈マグダラのマリア〉の礼拝堂と、その近く（北側）に(18)〈聖母に出現するキリスト〉の礼拝堂があった。以上のように、ヴァラツロの中央ゾーンの主要な礼拝堂群は、所与の土地の条件による多少の歪みはあるにしても、エルサレムの聖墳墓記念聖堂内のキリストゆかりの場所のそれぞれを方角的にもほぼ忠実に再現していた。しかし、こうした忠実な模造建築群のなかにあつて、唯一、(13)〈聖衣を剥がれカルヴァリオへ送られるキリスト〉の礼拝堂だけは、これの二本といえる場所を見出すことはできない。従つて、(13)の御堂もカイミーの構想にはなかつた礼拝堂と考えられる。

## 五 フラ・ベルナルディーノ・カイーミの

### 「代用エルサレム」―結びにかえて

四節で、ヴァラツロの一五―一四年当時の礼拝堂群を、それらに対応するパレスティナのキリストゆかりの場所やそこに建設されている建造物と比較した結果、「エルサレム」内にまとめた礼拝堂群(10)、(11)、(12)、(1)の礼拝堂」と「カルヴァリオ付近」に位置する(13)の礼拝堂を除くすべての礼拝堂に、聖地の地形模倣的配列が建築の構造的模倣のいずれか、もしくはその両要素の模倣が認められたので、一五―一四年の最古の案内書に挙げられた礼拝堂群のうち、(10)、(11)、(12)、(1)、(13)の御堂を除く礼拝堂群が、カイーミの構想に基づく初期の礼拝堂と考えられる。そして、それら五堂を除く礼拝堂の設置場所の同定結果に基づいて、カイーミが構想した「代用エルサレム」の配列を平面図上に復元してみれば、図31のようになるであろう。

同図に拠れば、一五世紀末年から一六世紀初めにかけては、「ナザレ」と「ベツレヘム」、「エルサレム」は現在と同じ位置に置かれていた。そして、聖地では旧市街から見て東側に展開しているゲッセマニヤガリラヤ山、オリヴ山

と、旧市街から見て南西に位置するシオン山は、ヴァラツロでは前者が「エルサレム」の西から北側を囲むように配され、後者は「エルサレム」のほぼ東に設定されていた。つまり、カイーミの「代用エルサレム」は方角的には必ずしもモデルに忠実ではなかったし、マムルーク朝時代のエルサレム市街をそっくり模造するものでもなかった。しか

し、土地の事情が許す限りは、キリストゆかりの土地相互の位置関係を方角的にも忠実に模倣し、それができない場合には、ひとつのキリストゆかりの土地内での聖所どうしの位置関係や、そこにある建築的モニュメントの構造は可能な限り忠実に模倣していた。また、カイーミが構想した「キリストゆかりの場所」は、エルサレムには存在しない(7)「ゲッセマニの園で眠り込む七人の弟子」の礼拝堂以外は、いずれもフランシスコ会士案内で巡礼者が訪れ、当時の巡礼記にも必ず挙げられているような場所であり、全贖宥や七年の分贖宥の対象にもなっていた(8)。さらに、彼の「代用エルサレム」を構成する礼拝堂のなかには、同会のエルサレムにおける最初の拠点であり修道院があったシオン山(前号図16)に関係する礼拝堂や、十四世紀以降同会が専有してミサを挙げていた聖墳墓記念聖堂の入口の右側に

あるフランク人礼拝堂(図30)に対応する礼拝堂(Ⅱ15)へ卒倒の聖母)、また、同会の祈祷席があつて、同会士によつて昼夜ミサが挙げられている同記念聖堂内の聖母に出現するキリストの礼拝堂に対応する御堂(Ⅱ18)へ聖母に出現するキリスト)も洩れなく含まれており、聖地の番人であつたフランシスコ会との密接な関係も窺わせている。

このように、カイーミの「代用エルサレム」の礼拝堂の配列では、何よりもキリストと聖母マリアに関係する聖なるトポスが最優先されており、事件が発生した順序は顧みられてはいなかつた。従つて、もし、出来事の発生順にミステリーを辿らうとすれば、巡礼者は山上を行つたり来たりしなければならなかつたはずである。それが、後に、カイーミのコンセプトを理解しない建築家や宗教家の目に、礼拝堂の配列と堂内のミステリー場面の順序が雑然としていて秩序がないと映り、彼らによつて礼拝堂が事件の発生順に整然と配列されるように改造される主な理由であつた。しかし、カイーミのねらいは、後代の建築家や宗教家の考へとはまったく異なる所にあつた。当時はルターによる宗教改革の狼煙はまだアルプス以北に上げられておらず、「代用エルサレム」建設の主な理由は、後代の「サクロ・モン

テ」についてしばしば指摘されるようなプロテスタントの伝播の阻止やカトリックの信仰の再強化にはなく、何よりもキリスト教徒の巡礼者に対するトルコ人の威嚇と迫害にあつた。また、カイーミが最も重要と考へて最初に建設したいくつかの礼拝堂が示しているように、それは、元来、西欧における長いエルサレムの模造建築の系譜に連なるものであつたと考へられる。最初に建設された礼拝堂とは、山上の土地やそこにすでに建設されていた最初の複数の建造物などのカイーミへの正式な譲渡に関する記録(一四九三年)に挙げられている、a.へキリストの墓)とそれに隣接する隠修所)とb.へ十字架の下(subtus Crucem)へ、そしてc.へ昇天)の三堂である。これらのうち、へ十字架の下)の礼拝堂は、一五一四年の案内書には存在していないため、それを「ヨシヤファトの谷」にある(初)へ聖母の墓)とみなす説(ガッローニ<sup>(2)</sup>)と、(16)へ聖体塗油石)の礼拝堂とみなす説(デビアッジ、ジェンティーレ<sup>(3)</sup>)が生じたが、アレッシの『ミステリーの書』の記述から推論を重ねた前者の説には明らかに無理がある。そこで、ここでは、(subtus Crucem)のCrucemを「カルヴァリオ(山)」に建てられた十字架と考へ、その下にある礼拝堂、すなわち

(6)の礼拝堂と同定した後者の説に従えば、カイーミが山上に最初に設定して建設したのは、「キリストの墓」と「聖体塗油石」、「昇天」の場所の三堂だったことになる。しかし、「subtus Crucem」という以上、十字架を設置したカルヴァリオ(山)の場所も、この時には当然確定されていたはずであるので、それらに加えることができる。以上の四つのキリストゆかりの場所は、「昇天」の場所を除けば、ほぼ同時期に遡るゲルリッツの複合体の構成要素と一致する。また、「キリストの墓」と「カルヴァリオ(山)」の場所を中心として、その他の若干の場所が加わる複合体の例であれば、ブリュージュヤトロワ(一六世紀初め)など、多くの西欧の町にも存在していた。従って、イタリアのヴァラツロの例だけが特異なわけではなく、複合的「代用エルサレム」はヨーロッパ的な傾向であったと言いうことができる。そして、それらは、エルサレムの聖墳墓とカルヴァリオ(山)ととりわけ聖墳墓の単体の模造建築によってエルサレムを代用させていた、西欧における長い聖地模造の系譜上に位置付けられるものであり、それから発展したものであったと考えられる。

「カイーミの「代用エルサレム」は、聖墳墓と

カルヴァリオ(山)を基礎にしながらも、「ナザレ」、「ベツレヘム」、「エルサレム」、「エルサレム近郊」までのイエスの生涯に関係するほとんどすべての重要な場所を、地形的にもできる限り忠実に、最も原初的なつましい建築物による組織的な複合施設として西欧において初めて提示したものであった。そして、その規模も、その他の西欧諸国(特にアルプス以北)の同時期の複合体の規模をはるかに越えるものであった。他の国々にはないカイーミの代用施設のこうした独創性の理由は、ひとつには、創設者が、十三世紀前半よりすでに聖地にあつてキリストゆかりの場所を守り、巡礼者の案内や保護の任に当たっていたフランシスコ会に属する神父であったことに求められるであろう。アルプス以北の「代用エルサレム」が、聖地巡礼の経験があつたとはいえ、ほとんどが俗人によって建設されたのに対し、ヴァラツロのそれは、パレスティナを熟知していた修道会に属し、自身も幾度か聖地を訪れた経験をもつ修道士によって構想されたものであつたからである。さらに、いまひとつの理由としては、デビアツジが言うように<sup>(3)</sup>、イタリア・ルネッサンスの新しい感性を挙げることができよう。カイーミの施設は、過去の史料や記録、遺構に注意を

払って写実を追究する厳格な精神性を示すものであり、中世の象徴主義からは隔たった新しい感性によってしか具現されえないものであった。ヴァラッロの「代用エルサレム」とは、これらふたつの要素が歴史上で重なったごく短い期間に誕生した稀有の施設であったと言える。対抗宗教改革以降の「サクロ・モンテ」や、バロック期にアルプス以北を中心に隆盛する「カルヴァリオ山」の複合体が、聖地バ

レステイナに関係しながらも、もはや「トボス」を核とする地形模倣とは無縁な、一連の「留」による行列的複合体となつて再登場することを考えれば、カイミの「代用エルサレム」は、サン・ヴィヴァルドのそれとともに、ルネッサンス期にのみ存在しえなきたきわめて稀少な「写実的エルサレム」であつたと言えよう。

### 註

※本稿は平成十五年度課程博士論文の第3章（ミラノ管区ヴァラッロのサクロ・モンテ―フラ・ベルナルディーノ・カイミのッエルサレム）を縮小、改題し、紙幅の都合上、前号と本号に分載したものである。文中で用いた括弧のうち、『』は書名、「」は主として文や注意を引こうとする語句の挿入及び引用、あるいはキリストゆかりの町や山全体など広域を特定する場合に用いた。へくは礼拝堂名、へくは絵画や彫刻作品のタイトルを表し、（ ）は本文に註記を加えるのに用いた。

### 三（承前）

- 18 G. B. Fassola, *La nuova Gerusalemme o sia il Santo Sepolcro di Varallo*, 1671, p. 22.
- 19 S. S. Perrone, *Guida al Sacro Monte di Varallo*, Torino, 1995, p. 75.
- 20 *Ibid.*, p. 75.
- 21 C. Debiaggi, *Sulla presunta Via Dolorosa al Sacro Monte di Varallo*, *Bolettino storico per la Provincia di Novara*, LXVII, pp. 74-75.
- 22 Perrone, *Guida al...*, *op. cit.*, pp. 78-79.



- p. 123.
- 7 D. Baldi, *Guida di Terra Santa*, Gerusalemme, 1973, p. 60.
- 五
- 1 Fra Niccolò da Poggibonsi, *Libro d' Oltremare* 1346-1350), Gerusalemme, 1945, pp. XLVI-XLVIII は略ち「オレブス」キリストゆかりの場所「ユダ」の顯著の一頁參照。
- 2 P. Galloni, *Sacro Monte di Varallo Origine e svolgimento delle Opere di Arte*, Varallo, 1914, pp. 11-15.
- 3 C. Debiaggi, 'La cappella 《subtus Crucem》 al Sacro Monte di Varallo', *Bollettino storico per la Provincia di Novara*, LXVI, 1975, pp. 72-80; G. Gentile, 'Da Bernardino Caimi a Gaudenzio Ferrari Immaginario e regia del Sacro Monte', *da Valle Sicid. L'immagine e l'immaginario al Sacro Monte di Varallo*, periodico annuale, Società Valsesia di Cultura, AnnoVII, n. 1/1996, p. 244.
- 4 C. Debiaggi, *A cinque secoli dalla fondazione del Sacro Monte di Varallo. Problemi e ricerche*, Varallo, 1980, pp. 29-30.
- 18 A cura di G. Testori e S.Stefani Perrone, *Artisti del legno. La scultura in Valsesia dal XV al XVIII secolo*, Borgosesia, 1985, p. 251.
- 19 P.Galloni, *Sacro Monte di Varallo. Origine e svolgimento delle Opere di Arte*, Varallo, 1914, pp. 19-20.
- 20 S. S. Perrone, '《Misterij》, architettonici di Galeazzo Alessi al Sacro Monte di Varallo', in G. Alessi, *Libro dei Misteri*, Bologna, 1974, pianta 1.
- 21 Fra Niccolò da Poggibonsi, *Libro d' Oltremare* (1346-1350), Gerusalemme, 1945, p. 25.
- 22 28' 29' 31' 稿者撮影・作成
- 23 A cura di C. Baratto, *Guida di Terra Santa*, Milano, 1999, p. 57.
- 24 A cura di S.S.Perrone, *Questi sono li Misteri che sono sopra el Monte de Varallo*, Borgosesia, 1987, p. 65, fig. 2.
- 25 A cura di G. Romano, *Gaudenzio Ferrari e la sua scuola*,

図版解説

1982, Torino, Accademia Albertina di Belle Arti, p. 191.  
26  
27 C. Debiaggi, 'Le cappelle dell' Ascensione dell'  
Apparizione di Gesù ai discepoli e l'originaria topografia  
del Sacro Monte di Varallo, *Bollettino storico per la*

*Provincia di Novara*, luglio-dicembre, 1978, p. 63, fig. 2 e p.  
66, fig. 3.

30 Aa. Vv., *Gli abitanti immobili di San Vivaldo*, Firenze, 1987,  
p. 51.

(附記) 文献や史・資料の閲覧、収集にあたっては、多くの  
研究機関や個人の御協力を頂いた。とりわけ、一五一年  
の最古の巡礼案内書の読解については、ヴァラッロ市立図  
書館の Dott. ssa Piera Mazzone 館長の御教示を頂いた。記  
して感謝申し上げます。また、本稿と同時期に水野千依氏に  
よって、ヴァラッロのサクロ・モンテの創設期におけるカ  
イーミの構想を、彼の四旬節説教の手稿からイコノロジー  
的に明察した論考が発表された。併せて参照されたい。(ヴ  
アラッロのサクロ・モンテ創設期におけるベルナルディー  
ノ・カイーミの構想―へ場の記憶へとへ心の巡礼)『京都  
造形大学紀要 GENESIS』6号、二〇〇五年、一九六―二  
一五頁)。

(せきね ひろこ)

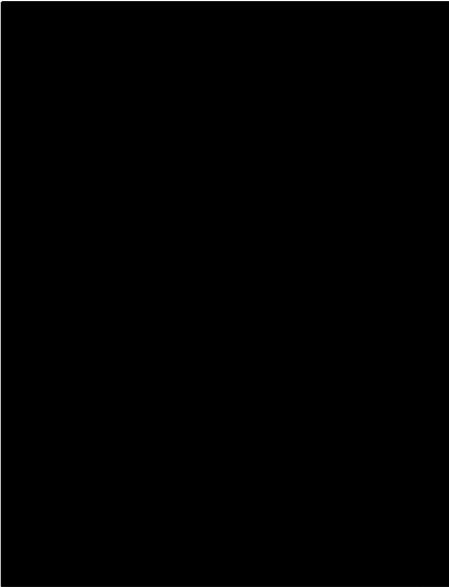


図20 S. S. ペッローネによる初期のサクロ・モンテの復元図 (1974年)

A—「ナザレ」 1. ロレートの聖家、2. 受胎告知、2a. 巡礼者用の開廊／B—「ベツレヘム」 3. 降誕、4. 羊飼いの礼拝、5. マギの礼拝、6. 割礼／「ピラトの館」 7. 笞刑、8. 荊冠、9. 十字架を運ぶキリスト (黒い教会堂)、10. 聖母マリアの慟哭／E—「シオン山」 11. 聖母被昇天聖堂、12. 最後の晩餐、13. 聖霊降臨／F—「カルヴァリオ山」 14. 磔刑、15. 聖衣剥奪、16. 聖骸布にくるまれるキリスト／G—「キリストの墓」 17. キリストの墓、17a. キリストの墓の隠修所、17B. スカロニーニ家の礼拝堂／H—「タボール山」／I—「オリーヴ山」 19. キリストの昇天／L—「ゲッセマニ」 20. 闇での祈り、21. キリストの捕縛、22. 聖母の墓／M—「小門」／C—「ヴィア・ドロローザ」／D—「キリストの泉」



図22 ヴァラッロ、現在の〈キリストの墓〉(第43堂)の礼拝堂(墓室)(ガウデンツィオ・フェッラーリ、《横臥のキリスト像》、木彫、16世紀初頭)



図18 ガウデンツィオ・フェッラーリ、《マリア永眠像》、c.1493—1498、ヴァラッロ、聖母被昇天教会(スクローロ)

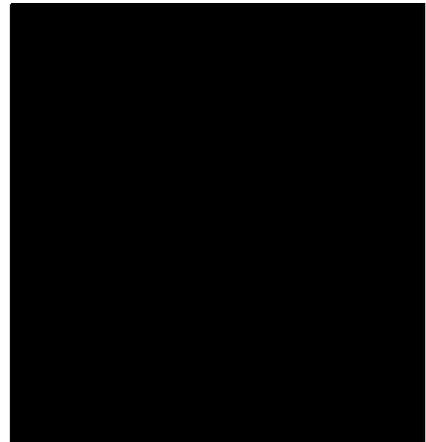


図19 P. ガッローニによる初期のサクロ・モンテの復元図 (1914年)

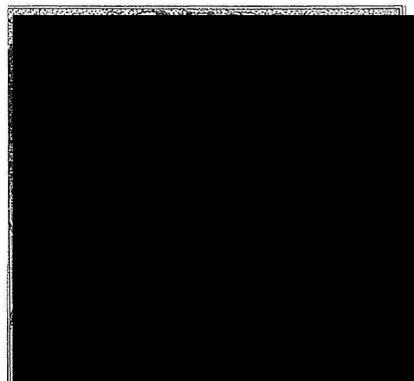
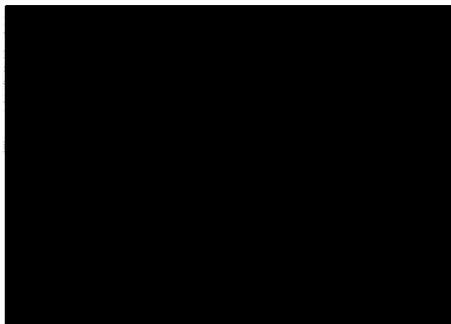
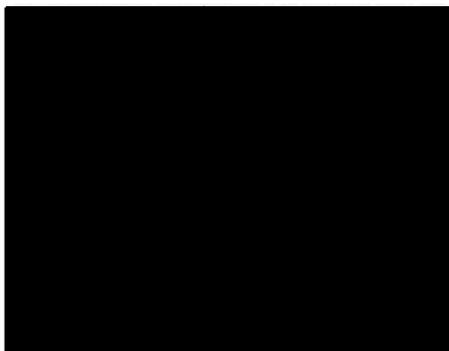


図21 エルサレム、聖墳墓記念聖堂内のカルヴァリオ

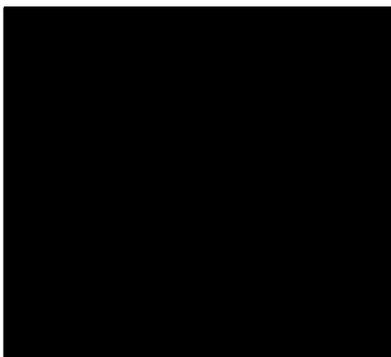
(Zuallardo による、1619年) 1. 築がれた南向きの扉、2. ナチン人の室の扉、3. アダムの亡骸が置かれた礼拝堂、4. キリストの十字架が打ち込まれた礼拝堂、5. キリストが磔刑に処せられた礼拝堂、6. 聖体塗油石



24



25



26



23

- 図23 エルサレム、聖墳墓の小礼拝堂の墓室
- 図24 ジョヴェノーネの工房?、《聖母子と諸聖人、ならびに寄進者》(部分)、ミラノ、ブレラ絵画館、1543年頃(ヴァラッロのサクロ・モンテの最古の景観図)
- 図25 ジュセッペ・ジョヴェノーネ・イル・ジョーヴァネ、《聖母に暇を告げるキリスト》(部分)、カレサナプロ(ヴェルチェッリ)、教区教会、16世紀後半
- 図26 C. デビアッジによるエルサレムのゲッセマニとオリーヴ山の地形とキリストゆかりの場所の配列図
- I : 聖墳墓記念聖堂がある方向、II : キドロン急流とヨシャファト、ないしはキドロン谷、III : 三人の眠る弟子の岩、IV : ゲッセマニのグロッタ、V : ヨアキムとアンの礼拝堂、並びに聖母の墓に通じる階段、VI : 聖母の墓、VII : ガリラヤ、VIII : 聖母への天使による死のお告げ、IX : 昇天教会堂、X : 主祷文、ないしはエレオナ教会堂、? : クレドの地下聖堂

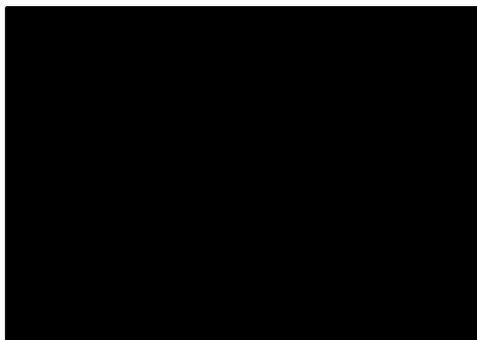


図28 かつてのオリーブ山と考えられる現在の  
タボール山と第17堂（〈タボール山上での  
キリストの変容〉）

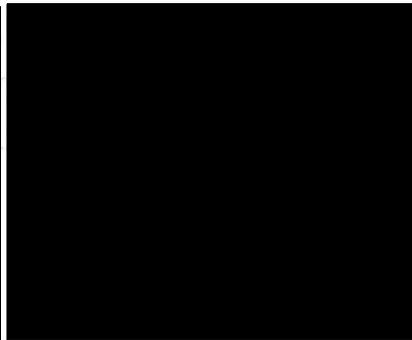


図27 C. デビアージュによるヴァラッロの  
初期のサクロ・モンテのゲッセマニ  
とオリーブ山の地形とキリストゆか  
りの場所の配列図

I : 〈キリストの墓〉の礼拝堂と隠修所、  
II : ヨシャファトの谷、ないしはキドロ  
ンの谷、III : 〈三人の眠り込んだ弟子〉の  
礼拝堂と推測される場所、IV : ゲッセマ  
ニのグロッタ（消失）、V : 〈ヨアキムの  
墓〉と〈アンナの墓〉の礼拝堂（消失）、  
VI : 〈聖母の墓〉の礼拝堂、VII : 〈ガリラ  
ヤで弟子に出現するキリスト〉の礼拝堂  
（消失）、VIII : 〈聖母への天使による死の  
お告げ〉の礼拝堂（消失）、IX : 〈キリス  
トの昇天〉の礼拝堂（消失）、X : 〈主禱  
文を教えるキリスト〉の礼拝堂（消  
失）、? : 〈クレド起草〉の礼拝堂と推測  
される場所

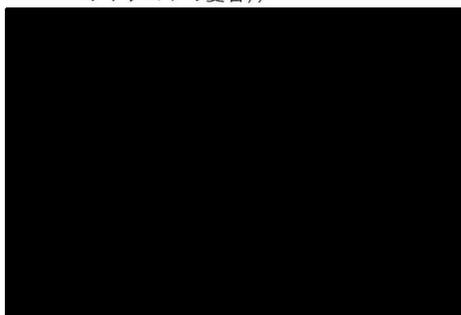


図29 ヴァラッロ、〈聖母の墓〉の礼拝堂

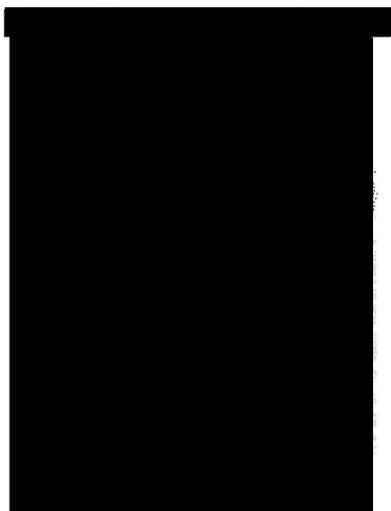


図31 ベルナルディーノ・カイミが構想した  
ヴァラッロの「代用エルサレム」（推定）

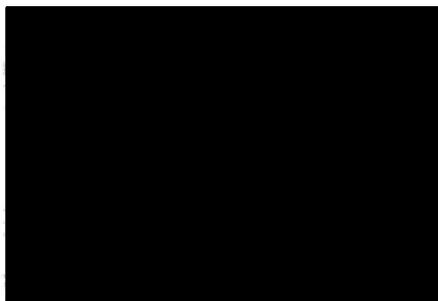


図30 十字軍時代のエルサレムの聖墳墓記念  
聖堂の平面図 (Corbo による、1981年)  
1. フランキ（聖ヨハネと敬虔な婦人たち、  
あるいは擗哭の聖母）の礼拝堂を抜けて聖  
堂内に入るための階段、2. アダムの礼拝堂、  
上階はカルヴェリオの礼拝堂、3. 聖墳墓の  
小礼拝堂、4. マグダラのマリアの祭壇、5.  
マグダラのマリアの礼拝堂、6. 聖母に出現  
するキリストの礼拝堂